

紹
介

吉田忠
蔵氏

甲南女子大本「こわたの時雨」

大
槻
修

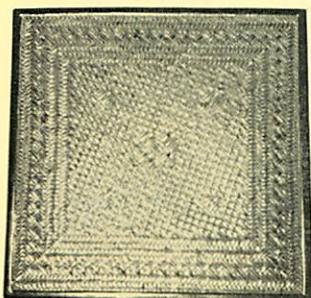
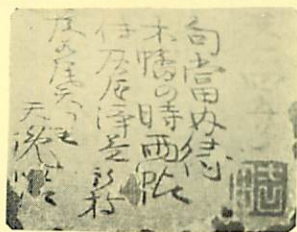
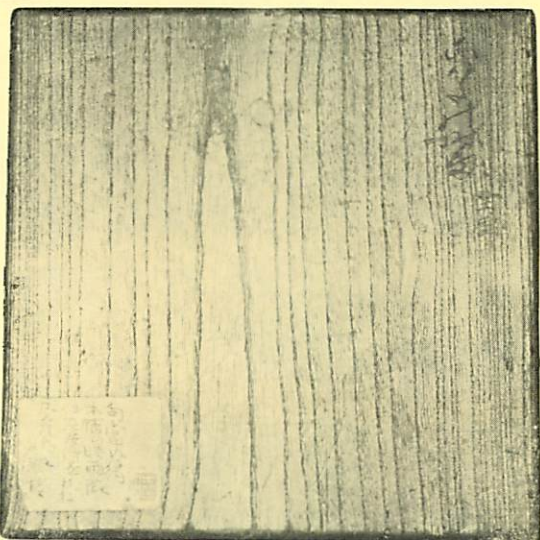


甲南女子大学本「こたわの時雨」の
本文，付属文書，内箱など。



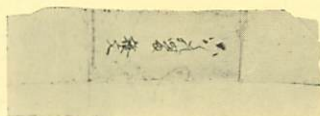
(挿図1) 表紙。

(挿図2) 右上は、外箱で、その貼紙
を別図に示す。下は内箱。

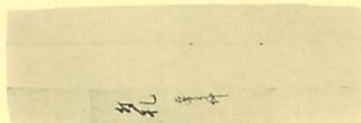
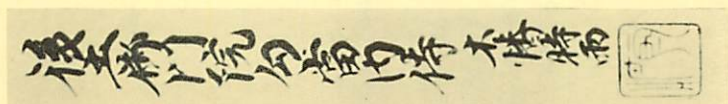




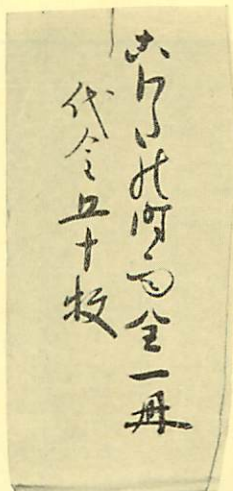
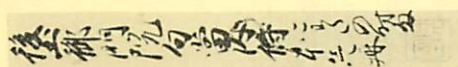
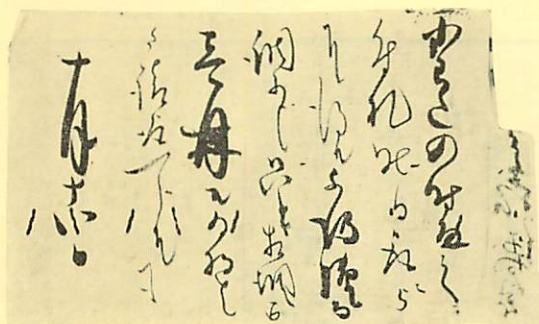
(挿図5) 古筆了音の折紙。



(挿図6) 古筆了仲の極め札。



(挿図7) 木村見室の極め札と送り状。



(挿図8) 値段つけ。

序

このたび甲南女子大学の所蔵するところとなった吉田忠氏旧蔵「こわたの時雨」について、ここに改めて紹介する。すでに本書については、田村悦子氏が「美術研究」第二百七十六号（昭和四十六年七月）および第二百七十七号（同九月）誌上に、その形状、筆蹟、付属文書の分析など詳細な研究を発表されたが、御発表が「美術研究」誌という性格上、いささか学界にその浸透度を欠く嫌いが無いでもなかった。

また吉岡曠氏編「源氏物語を中心とした論攷」（昭和五十二年三月、笠間書院刊）に、筆者も一文を寄せ、「こわたの時雨」伝本考と題して本書の伝本系路を分析の結果、その優秀性を認め、加えて以下に紹介する三本の対校本文を掲載した。

ただ、吉田定氏の非常な御好意によって、このたび甲南女子大学に本書を譲渡されたこと、稀覯本として本学図書館に納められたのを機会に、ここにその図版等をも含めて、その概要を説明するゆえんである。

一

本書の形状は、すでに田村氏の述べられた通り、竪十五センチ、横十六・三センチの升形本で、前・後表紙を除いて六十六丁、両面書写の綴葉装、六括り（但し、第五括りまでは、五枚を重ねて折った十丁、最後の第六括のみ、九枚を重ねて折った十八丁、そのうち二丁は白）である。大体は一面十二行から十三行、前・後表紙ともに外側は雷文繋や唐草文、鋸齒文等を織り出した平金糸入の裂地をもって覆われ（挿図1）、見返しは金銀箔をちらしている。

箱は二重箱、外箱（竪・横ともに二十・四センチ、高サ六・三センチ）は柾目の通った桐材、右肩に打つけ書きで「こわたの時雨全部」と墨書し、左下隅には貼紙にて

天六四号 回

句當内待

木幡の時雨帖

伝灰屋浄益所持

後水尾天皇

天覧□

とあるが、そうとうに今は薄れている。内箱（竪・横ともに十八・

三センチ、高サ被蓋二・八センチ、身三センチ)は、材料が黒檀、かぶせ蓋でその上面は竹の網代細工をはめこんでいる。(以上、挿図2)

本書の特徴は、実に七種を数える附属文書の豊富さであろう。

一 佐野紹益書状

二 古筆了珉書状

三 古筆了音折紙

四 古筆了仲極め札

五 木村見室極め札并びに送り状

六 値段つけ

七 由来書

そのうちで特に関心をひくのは、一、灰屋佐野紹益の書状に記された本書の伝来経過であろう。全紙縦二十九・七センチ、横四十二・三センチその全文を田村氏解説によって記す。(挿図3)

御状之趣、得其意候。近日尾州へ

參候間、其前一夕可致面談候。

一こわたの時雨之事、御尋候。先年宗召老

御見せ候。珍敷物と存候。飛鳥井一位殿へ

物語仕候へハ、名を聞よりおもしろき物

ニ候。御覽有度との事ニ候故、御老父へ申入、懸御目候へバ、

法皇様へ被入叡覽候所ニ、つるニ

きこしめされたる事もなし、

名もおもしろく、古代之物にて、言葉

つかひもたゞならず。先写とめられよと

勅定にて、則一位殿御写候へ共、女筆

にて候へば、よめかね候との事ニ候て、十四五

ばかり御付紙、又本ノマ、と有之所も有之候。

我等ニ校合被仰付候、仕合能無残所

悉よミ候と申上候へバ、言の外之御感、

此こわたの時雨にて世に名をふり候ほど

御褒美ニ預り候故、難忘、今一度

見申度存候。飛鳥井殿へ御写之外ニハ、世ニ又

有之間敷ものと存候。御秘蔵尤ニ存候。恐々謹言。

五月廿三日

(花押)

先日珍敷一種、過々当々。

(端裏切封ウハ書)

様

紹益

佐野

關島原の吉野大夫を息子紹益の妻にした佐野栄庵の話は橋南谿の北窓瑣談にみえ、田村氏の論考にも紹介されているが、この書状は紹益の真蹟とみて間違ひなからう。

二 古筆了珉の書状も、前記紹益の書状の宛名抹消と同じく宛書は切除されている。写本の筆者を「後土御門院勾当内侍」と鑑定、また六個所帯封の旨が記されている（現在は、すべて封をはずされ、六枚の封のみ、別個に納められている）（挿図4）

三 古筆了音の折紙も、本書の筆蹟を後土御門院勾当内侍とする。「琴山」の印。（挿図5）

四 古筆了仲の極め札も、同じく筆者を後土御門院勾当内侍と鑑定、「守村」の黒印。（挿図6）

五 木村見室の極め札並びに送り状も同じく勾当内侍。なお宛書は切り取られている。（挿図7）

六 値段づけ。代金五十枚とする。（挿図8）

七 由来書の内容は前掲の紹益の書状と相応し、飛鳥井一位を雅章、法皇を後水尾院と記す。（挿図9）

以上、七種に及ぶ付属書類のうち、二～七にわたる文書の解説文は省略する。田村氏の御論考（美術研究、第二百七十七号）の註記に依らねたい。

ついで、その筆蹟云々であるが、付属書類のなかで佐野紹益の書

状には女筆とあり、古筆了珉、了音、了仲など、後土御門院勾当内侍にあてているが、斯界の権威であられる田村氏の鑑定によると、その断定はむずかしく、かなり特徴ある書風から時代的特徴を抽出して、一応室町末期から桃山時代にかけて、とみておられる。（挿図10）

二

生みの母に嫌われ、木幡の里に籠る女君（奈良兵部卿右衛門督の中君）と、忍んで初瀬詣での中納言（関白の一人息子）が、時雨を機縁に結ばれ、以下、物語の展開のなかで、二度も双生児出産のシーンを描いた「こわたの時雨」は、従来、弧本として、「国書総目録」の当該項目にも、京都大学国文学研究室蔵本を挙げるにすぎなかった（本書については、玉上琢弥氏が「国語国文」第七巻第十号「昭和十二年十月」誌上に詳細なる研究と翻刻を発表されている）。ついで既述の通り、田村氏によって吉田忠氏蔵古写本「こわたの時雨」の所在するを報ぜられ、さらに昭和四十九年に至り、樋口芳麻呂氏が、高松宮家本「木幡の時雨」のあることを発表され（愛知教育大学国語国文学研究室「国語国文学報」第二十七集「昭和四十九年十二月」誌上）、ここに、この物語は貴重なる三本を迎えるに至

った。

そこで、この有難い機会をとらえて、筆者は、以上御三方の御論考に導かれながら、改めて三本（京大本・高松宮家本・いまは甲南女子大本となった吉田家本）をとりあげ、相互関係からその伝本系統を考察し、併せてそれぞれの性格を分析した上、対校本文を発表したことで、すでに述べたところである。いま吉田家本はその名称を甲南女子大本と改めて、その概要を略記しておきたい。

イ 甲南女子大本と京大本 田村氏の調査によると、甲南女子大本には、かつて末尾錯簡があった（現在はずでに綴じ糸もなく、その錯簡は是正されている）。然してそのまま転写すると文字通り京大本の末尾錯簡の順序となり、思えば玉上氏による京大本末尾復原作業の御苦労も、本来、この甲南女子大本のかつて保有していた末尾錯簡に由来することであった。

つぎに甲南女子大本の特異な筆癖からくる京大本の誤読と覚しい例として三十例、京大本にみられる脱文と覚しき個所が、甲南女子大本を写す折に起因すると推測されるもの五か所、および両本に關係する抹消符など、総合的に判断したところ、田村氏も述べられた通り、京大本は甲南女子大本の直接の写しと考えられる。（なお田村氏の注記によると、初めて吉田家本として本書を手に入れた時、首部にも錯簡があった由、現在、甲南女子大本として、すでに是正

されている）図式化すれば



といった伝本系統になろう。

ロ 甲南女子大本と高松宮家本 まず甲南女子大本の墨付は六十三丁に対して、高松宮家本も同じく墨付六十三丁、その各丁オウの行数まで完全に一致しており、また両本とも、十九丁半分（全体のざつと三分の一）を除いて、他は各行の字配りまですべて一致、加えて一個所に相互一字のズレを生じたほかは、完全に各丁の首尾が合致している。

また両本にみられる抹消符、誤写訂正法、誤脱補記の例をあわせ考えるとき、高松宮家本は、甲南女子大本の直接の写しと断定しても差しつかえないと思われる。ただ高松宮家本には錯簡がないゆえ、かつて甲南女子大本が無錯簡の時期に写されたものであろう。よって図式化すれば、



となろうか。

ハ 高松宮家と京大本 すでに樋口氏の詳しい考察があり、結論

として京大本以上の善本であり、高松宮家本の資料的価値の極めて高いことが裏付けられている。ただ甲南女子大本の虫損、その「中打ち」修補が影響して、両本に異文を生じた例がみられるけれども、やはり京大本に対して高松宮家本の優位は動かない。

ニ 三本の関係

以上、三本の伝本系統を一覧表にしてみると、つぎのようになる
と考えられる。



現在、綴じ糸をはずされ、その首尾と末尾に、計二か所の存在した錯簡も是正されている甲南女子大本「こわたの時雨」は、まさに現存する他の二本——高松宮家本と京大本とを生み出した直接の親ともいえるべく、その資料的価値は図り知れないものがあるうと思われ。なお三本の伝本系統の考察についてその詳細は、前述した吉岡曠氏編「源氏物語を中心とした論攷」（笠間書院刊）のうちの拙稿「こわたの時雨」伝本考——を参照されたい。

結 語

ここに、吉田忠氏旧蔵甲南女子大本「こわたの時雨」について、その形状、筆蹟、付属文書に関しては田村氏の御論考をふまえて、一方、高松宮家本と京大本とをあわせての、三本の伝本系統からみて、甲南女子大本の持つすぐれた価値に関しては既に発表した拙稿の要旨を略記して、以上そのおおよそを述べてきた。

かかる貴重な写本「こわたの時雨」が、甲南女子大学の所蔵するところとなったことについて、まず旧蔵者の吉田忠氏に深く感謝し申し上げたい。研究のためとは申せ、不躰けなお願いを心よく許されて、筆者に長期間のあいだお貸し下されたあと、学界発展のため、あえて甲南女子大学に本書の譲渡を申し出られたこと、まことに有難いことであった。また仲介の労をとられ、何かと御厚情を賜った水谷仁三郎氏にも深く御礼申し上げたい。

大学における総合的教養の場として、何よりも図書館の充実を叫ばれ、また真理探究の場として、本学大学院の育成、発展に熱情をそそがれる鯉坂二夫学長は、国文学の方面に関しては、すでに伝為家筆、源氏物語「梅ヶ枝」一帖をはじめ、伝為相筆、同「紅葉賀」、室町時代古写本源氏小鏡など貴重な写本を大学図書館の貴観本とし

て購入せしめられたが、ここに重ねて、いわゆる擬古物語の佳作「こわたの時雨」のうち、もっとも写本としてすぐれた本書の購入をも心よくお認めいただいたこと、——末尾ながら学長はじめ大学当局に重ねて深く感謝の念を書き記しておきたい。なお、近く本書の複製本を作る計画のあることを付記する。

(昭和五十二年十月一月記す)